

[千野千綴 file.1]
九州遊会



三苫 麻里

本日は荒れ模様、の天気予報はみごとに外れた。

雨過天晴の青空のもと、赤いポンコツカーが九州自動車道を南へ走っている。福岡市内では五分咲きだった桜が、南下するにつれ開いていくのがわかる。菜の花の黄色も加わり、窓の外は絵本のような春景色だ。後部座席の子どもたちは大はしゃぎしている。

「うるさい。騒ぐな」

運転しながら怒鳴っているのは、大学生の服部健太。だらしない性格で助手席はゴミに占領されている。

「翼の声がかいんだ」

「ウソよ。翔太のほうがもっとうるさい」

「いいから、だ・ま・れ！」

荷物と一緒に後ろでぎゅうぎゅう詰めになっている子どもは3人。

1人は健太の弟の翔太。元気いっぱい、少しもじっとしていない。

もう1人は翔太の幼なじみの翼。女子だが空手の茶帯で気がつよく、すぐに翔太と喧嘩になる。

2人に挟まれ困っているのはアユム。去年、翔太と翼のクラスに転入した転校生だ。家が近いせもあってか、いつも3人一緒である。皆、今度の4月に小学6年生になる。

「もう熊本だ、高速降りるぞ。誰か地図見てナビしてくれ」

「あ、ぼく地図見るの得意です」

おとなしいがしっかり者のアユムが地図を受け取った。標識と見比べながら的確に指示を出していく。熊本市内は渋滞していた。白川を渡りゆっくり市街地へ入ると、熊本城への案内標示が目につきはじめる。

「お城があるんだ！ ケン兄、お城行きたい」

「ダメだ、今日は九州遊会なんだから城には行かないよ」

「えーっ」

子どもたちは、皆がっかりした表情を見せた。

『九州遊会』はマニアの集う一種の同好会で、健太もそのメンバーだ。今年は九州各地の「人」を訪ねて話を聞いており、今日の集まりもその一環である。子供向けの内容ではないのだが、なんだかんだ言いつつ面倒見のよい健太が子守りをかねて3人を連れてきたのだ。

繁華街のコインパーキングに停めて車を降りる。すし詰め状態からやっと解放されて、翔太たちは嬉しそうに跳びはねている。土地勘の無い健太がきよろきよろしていると、遊会のホープ・光山が迎えに来てくれて一行は会場へ向かった。

会場は店舗の2階。白が基調の部屋に北欧の鮮やかなファブリックが配置され、洗練された雰囲気だ。他のメンバーは既にそろっており、健太たちが最後だった。遊会の姐さんリーダー中間ユキエの進行で、会はさっそく始まった。

九州遊会

今回のチューターは子ども遊びの達人、原賀隆一氏だ。熊本市内でデザインオフィスを営むかたわら、子ども遊びの本を自費出版し、各地で実演や講演をしている人物という。だが今日の遊会は昔の遊びといったほのぼのした話題ではなく、「理（ことわり）」をキーワードに社会の裏側に迫る鋭い内容だった。原賀氏は、白髪まじりの髪を後ろで結んだ映画監督のような風貌で、世間の常識を次々にひっくり返していく。となりにいるのはボブヘアが印象的な真知子夫人。筆記用具をさっと渡したり、艶のある声でフォローしたりと、そのサポートは完璧だ。

巨大資本の陰謀、国際政治のかけひき、邪馬台国の真実と、原賀氏の話はとめどなくあふれ出す。遊会メンバーはひきずり込まれるように聴いていたが、子どもたちにはさすがに難しかったのだろう、翔太と翼は早々に寝てしまっていた。アユムはかなり粘っていたのだが、白村江の戦いあたりで机に沈没した。



座がもっとも盛り上がったのが「タバコは健康に良い」という話題が出たときだった。参加メンバーで唯一の愛煙者、畑中メイは「良いこと聞いちゃった～」と大喜びでノートに書きつけている。だが残留農薬が心配なので外国産のオーガニックタバコが良いと言われ、「個人輸入しようかしら」と悩んでいた。

話が終わった頃には、日はとっぷりとくれていた。起こされた翔太たちは目をこすっている。最後に子どもたちのためにと行って、原賀氏が鞆から道具を出していくつかの遊びを紹介してくれた。

まずはゼムクリップをつないで作ったミニチュアの網。三角帽子のような形で頂点には輪ゴムが結んである。このゴムをねじって手を放すと、クリップの網がくるくる回ってきれいに開くのだ。

「どういう力が働いているか分かるかい？」

「遠心力です。計算式は $F=mV^2/R$ 」

すらすら答えるアユムに、大人たちがおーっという感心の声をあげる。

次に厚紙とストローで作った紙とんぼ。翔太が手をさっと擦りあわせ器用に飛ばしてみせると、これまた拍手が起こった。



「私もなんかやりたい！」

負けん気いっぱい翼に「じゃあ、女の子にはこれがいいかな」と紙ナプキンのバレリーナの作り方を教えてくれた。

「可愛い〜」と翼もマネしてみるが、でき上がりはヨレヨレで悲惨なものだった。

「なんだ、それ。呪いの人形かよ」

「うるっさい、わざとよ。翔太のば一か」

「なにー、ばかって言うほうがばかなんだぞ」

いつものように喧嘩をはじめると健太が「やめろ」と割って入る。

「いやいや、元気で武者んよか子どもたちですよ」

「むしゃんよか？」

首をかしげたアユムに原賀氏が微笑む。

「熊本のほめ言葉だよ。これは何にでも使う。たとえば絵にも、人にも、生き方にもね」
そう言って3人の頭をそれぞれ撫でてくれた。



本妙寺桜灯籠

会の終了後、地元メンバーの中松からせっかくなら「本妙寺桜灯籠（はなとうろう）」を見てはどうかと勧められた。今晚かぎりの催しで夜店も出ると聞き、翔太と翼は行きたい行きたいと騒ぎ出す。健太は早く帰りたかったようだが、結局子どもの勢いに負けて行くこととなった。原賀夫妻は「あの階段はちょっとねえ」と苦笑いして、同行はしなかった。



翔太たちを含め12人が車に分乗し、本妙寺のある花園地区へ移動した。10分ほどで到着し、人の行き交う参道をしゃべりながらゆっくり上りはじめる。翔太はおこづかいでさっそくチョコバナナを買い食いしている。

仁王門をくぐると、景色が一変した。

「うわ、すげえ」

「幻想的！」

「こんなの初めて」

皆それぞれが思わず声をあげた。

参道の両脇には和紙の灯籠がずらりと並べてある。桜並木の枝にも竹筒の灯籠が吊られており、満開の花を闇夜に白く浮かび上がらせていた。のり気でなかった健太も、携帯で写真を撮りまくっている。あるかなきかの風に灯火がゆらめく。溶けた蠟の匂いと、寺から漂うお香が交じりあい、空気が粘り気を帯びてくる。桜の周りだけ夜の密度が濃いようでもあった。

「なんかさ、桜の下に死体があったらとか思うと怖くない？」

「そっすね。よく言いますよね」

起業家の押田と大学院生の福見が小さな声で交わしあった。華やかさが極まって滅びへと転じる、そのアワイに自分たちがいると感じたのかもしれない。

桜並木の参道を10分ほど歩いたらどうか。目の前に噂の石段が登場した。この石段はおよそ160段。胸を突くほどの急斜面なので「胸突きガンギ」との呼び名がついた。

石段の中央には寄進の石灯籠がびっしり並び、ちょうど中央分離帯のようになっている。右側通行で登りきると、正面に拝殿が見えた。弦の音にひかれて中を見ると、筑前琵琶の演奏中である。裏手にまわると柵に囲まれた建物があり、「浄池廟」という扁額がかかっていた。たくさんの人々が手をあわせ、深々と礼をしている。



「ここって神社なの？」

翼の問いに、歴史に詳しい中松が優しくこたえる。

「違うわ。お墓よ、加藤清正公の。熊本では『清正公（せいしよこ）さん』って呼ばれて慕われてるの」

「えっ。お、お墓...」

実は怖がりの翔太がびくっと身を震わせる。辺りには琵琶の音が響きわたり、ムードは満点だ。

「あれ、こんなところにお猿さんがいる」

浄池廟の左手からアユムの声がした。翔太は逃げ出すように、そちらへ走る。その一角は視界が開けており、熊本市街の夜景が一望できた。ライトアップされた熊本城も小さく見える。アユムの前の祠の中には、たしかに小さな石の猿が祀ってあった。

「『論語猿』よ。由来もそこに書いてあるでしょ」

灯籠の灯りを頼りに、アユムが案内板を読み上げる。

「えっと...。ある日『論語』という本を読んでいた清正公、用事があって部屋を出ると、飼っていた猿、ご主人のまねをして、墨のついた筆を持ち『論語』に...。やがて、部屋に戻った清正公、猿を叱るところか頭をなでて『お前は猿なのに、そんなに勉強がしたいのか』と猿をほめてやったそうです。このお猿さんの頭をなでてあげると、勉強が好きになるという言い伝えがありますよ。か...へえ、清正公は動物好きだったのかなあ」

アユムは案内板と石猿を交互に見比べた。

虎と猿

最初に異変に気付いたのは、翔太だった。「ちょっと」とアユムの袖口を引っ張る。はっとして、アユムは翼の姿を探した。いた。翼は、山桜の樹の下に焦点のあわない目をして立っている。アユムは境内を見回した。風景は先ほどまでとかわらない。なのに境内から人の姿が完全に消えている。もちろん、遊会メンバーもだ。アユムと翔太は目を合わせてうなずきあった。翔太のほうは少し震えている。

実は2人、いや翼も含め3人にとってこれは初めてのことでなかった。翼、翔太、アユムの3人がそろると、不思議な「サカイ」に入りこんでしまうことが時々あるのだ。

アユムはそうっと翼に近づいた。翼の足元にちょこまかと動き回るものがある。子猿だった。石造りではなく、ちゃんと毛のはえたニホンザルである。子猿は翼の細い身体をよじのぼると、その肩に座った。すると放心状態だった翼が、顔に手をあててさめざめと泣き始めた。あきらかに、いつもの翼とは違うしぐさである。

「どうして泣いているんですか。それは論語猿？」

翼の唇から、若い女の声がもれる。

「はい。私はこの猿のお世話をするはした女でございます。世の人は心あたたまってお話と申されますが、清正公は血を吐くような思いで論語を読んでおいででした。小猿を膝にのせ『わしは不忠者なのか』といつも涙を落とされるのでございます。そして二つの思いに引き裂かれ、とうとうみまかられてしまいました」

女は、はらはら涙をこぼす。そして山桜の枝を折りとって舞い始めたのであった。小猿はキキッと鳴いて、翔太の足元に駆け寄った。

「言ってる意味がよくわかんないや」

「清正公は恩のある豊臣家と徳川幕府の間で板挟みになっていたんだ。たぶん、論語を読んでは自分におきかえて悩んでたんだよ」

女の舞は激しさをまし、山桜の枝をまるで槍のように振り回している。そして、ふいに足を止め大声で叫んだのだ。

「お、大阪城がっ…。大阪城が燃えておる！ 淀さまっ、秀頼君い…」

野太い男の声だった。

「おい、翼！ だ、大丈夫か。今度は誰の霊がのりうつったんだよ」

「たぶん…」

アユムは浄池廟をちらっと見た。

「えっ、か、加藤清正…？」

驚く翔太にアユムは頷いた。

翼、いや翼にのりうつった清正は、突然翔太の足元にいる小猿に向かってひれ伏した。

「殿下、殿下…。申し訳ございません。お許してください、殿下」

「秀吉に謝ってるんだ」とアユムがささやいた。

清正の死から4年後の元和元年（1615）、大阪夏の陣で大阪城は落城。秀吉の遺児・秀頼と生

母淀君は自害し、豊臣家は滅亡した。清正の霊の目には、ライトアップ中の熊本城が炎上する大阪城に、小猿が秀吉に見えているらしかった。清正の霊は地面に額をこすりつけ、謝り続けている。翼の二つに結んだ長い髪が、泥にまみれる。翔太はいたたまれなくなって飛出し、翼の身体をぎゅっと抱き寄せた。

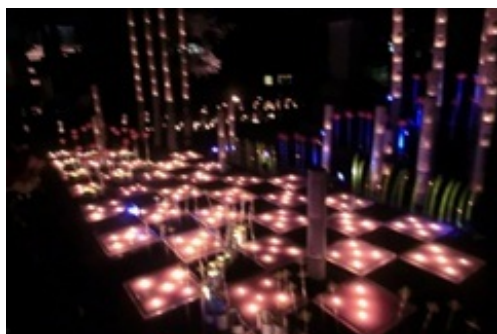
「もうよい、お虎。もう、じゅうぶんじゃ。苦しかったのう、お虎よ」

翔太自身も予想しなかった言葉が口からでた。清正の別名は虎之助。もちろん翔太は知るはずもない。

その瞬間、翼の身体から霊の気配がふっと抜けて、彼女の身体が崩れおちた。同時に、境内に人のざわめきも戻った。まるで、何事もなかったかのように、元通りの世界へ戻っている。アユムはほっと息を吐いた。

「お前たち、泥だらけで何してんだ。翼はどうした、眠ってんのか」と健太が不思議そうに見ている。翔太に抱えられたまま翼は気を失っていた。

そのとき、突風がふいて桜の花びらが散った。境内の白い幟がいつせいにはためく。幟には加藤家の蛇の目紋・桔梗紋とともに「南無妙法蓮華経」の文字が染め抜かれている。清正が篤く信仰した法華経のお題目だ。はためくお題目の文字に見送られ、舞い散る桜は天へ昇っていった。



遊会の一行は参道を降りたところで、原賀夫妻と偶然出会った。夫妻は食事をしてちょうど帰るところだという。健太におぶわれた翼を見て、原賀氏がどうしたのかと尋ねた。まだぼんやりしているが、翼の意識は戻っていた。

「ん...、何かよく覚えてないんだけど、桜見てたらクラクラしてきちゃって」

翼の手は山桜の枝をしっかりと握ったままだ。

原賀氏は翼の頭を優しく撫でた。

「そうか、桜に酔ったんだね。ゆっくりお休み」

言われて翼は、健太の背中ですうっと眠りにはいった。

深夜の九州自動車道。健太の車は福岡へ向けて走っている。行きと違って車内は静かだ。後部座席の子どもたちは3人ともぐっすり眠っている。ラジオで時報が鳴った。午前0時をまわり日付が変わったことを告げている。そうか、今日から4月かと健太はつぶやいてクラッチを踏んだ。

エピローグ

桜灯籠の翌朝、拝殿のまわりを片付けていたボランティアスタッフがおかしなことに気づいた。祠の中にあるはずの石の猿が、浄池廟のまえに置いてあるのだ。首をかしげながら元に戻したあと、スタッフは浄池廟の裏の山をのぼりはじめた。300段の階段を上りきったさきは公園になっていて、加藤清正の銅像がたっている。その銅像にもいたずらがされていないか、見に行ったのである。槍を持ち烏帽子をかぶった8メートルの清正の像は、普段ととくに変わりはない。スタッフは安心して清正の銅像に手をあわせた。

「清正公さん、今日から熊本市は政令指定都市になりました。どうかこれからも肥後の国をお守りください」

公園からは熊本の市街地が一望できる。清正の銅像はこころなしか、いつもより晴れやかな表情に見えた。

千野千綴 senya-sentetu 九州遊会file.1

肥後の桜

<http://p.booklog.jp/book/48508>

著者：三苦麻里

編者：瓢箪座

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48508>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48508>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.